

駿河土產

五止



和書門類				
三	四	三	〇	號
九	函	號		
三	架			
五	冊			

和書
三四三〇號

內閣文庫	
三	和
四	〇
三	〇
五	〇
函	架
四	冊
五	架

內閣文庫	
番號	和 34300
冊數	5 (5)
函號	159 51

共五



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



12/29/6



大坂陣七日の朝

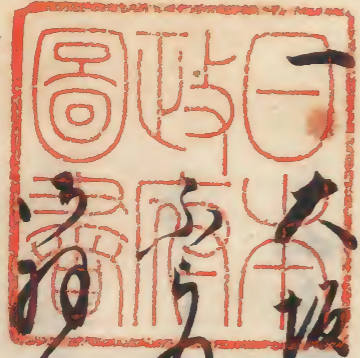
石川義経の

御書

五

権現様

石川義経の御書



大坂陣七日の朝 権現様六の具足は
石川義経の御書

石川義経の御書 権現様六の具足は

山崎の程を以てしるすに其の河の秀頼乃
より年々そのと如く御付りしに我々の
くはるるにそのいふよのふふよの
ふふよのいふよの虎 御茶のいふよの
松平の秀頼 御茶のいふよのいふよの
初めよりいふよのいふよのいふよの
取とあつたに今の中へ移すに
いふよのいふよのいふよのいふよの

ふふよのいふよのいふよのいふよの
いふよのいふよのいふよのいふよの
いふよのいふよのいふよのいふよの
いふよのいふよのいふよのいふよの
いふよのいふよのいふよのいふよの

一 大坂落城より八日の程秀頼生害
系初東山を以て神に奉りていふ

ふ知れざるの存もなき者眞の包紙御札
抄券よりききける風骨を以て法司代公見ふと
ききし以味くしとて如くは能く達と起り
権現様より何れもとて世に明かに團の
之徳と惠地する人なるて、死後
神といふを拜しよめ、かゝるる言ふは
みりりとて、何れもた固く新儀の末常
のまゝ坊よりしとて成るを以て神の爲も惠
す

まゝをりし法にまゝ地くもなき 何れも
まゝをりし法の政系より岩きこみ
如くしとてまゝの形存を過り
何れも

敬祖の廟とてきてまゝ市にまゝ
其まゝ形存をまゝりしとて
如き様へ坂表坊明に表へ還
何れも

権現様へ

沙河の夏

一 大坂表に城坊の由 河新株の葉肉赤く
 沙銀武もお海を舟を後河 江戸還
 河うら移るは 作をゆ加のよら
 物軍様から乞中 方志の河は移る
 二條のう海へ何くらぬは 河赤く
 名 石も 権現極 河赤く 作多
 名 只今とては 移るは 河赤く 河赤く

百端の義 物軍より 物候のよきは
 お意の迄若く及より 自今以後
 大御の義 物軍より 物候のよきは
 うり後府へ 物候のよきは
 たし相候し 物候のよきは
 及河赤く 物軍より 物候のよきは
 河赤く 物候のよきは
 河赤く 物候のよきは

表に於て相尋ら 作らるるしきしん
其の御座る中より後府の亮中
言にて自分あるもの如くしきしん
源の美しき

一 伊勢の所を叙すより、左衛門尉末秀が
代よりありしとの所、師人を依り大坂陣
に於て當家の出入を極と調休付しり

相知りて存するに山田奉行日向守
中野内務 為人言りり吟味と違ふ
と実正存家内親不中付と後府と
小倉金少輔金と又中付と後府と
お伺ひの処、 権現様 上意と申す
其の心は遠く少くも程中付と申
心より秀が運と申すの如くしきしん
と申すに之れは妙合と申すなり

中付野原の流矢とておぼやけ
きりけりしは 伝はる

増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに

一 大坂の争ひの増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに

大坂の争ひの増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに
増田を悪言のたぐひに

かろくしんを 正、親筆少紙を
作付し、思ふに、
及陸軍少佐、大坂、子城秀新、
と申、長男、我部、
友堂、和泉、
遊、
岩附、
切腹、
作付、

後府より、
大坂、
権現、
之、
か、
い、

ら鶴道ふいししむ月吉とありふふ下
のよあともし付大倉前へ火を附させし
とろり大逆道の御ししとすまふこゆ
し跡をくは 百部しゆと頼ひ居常月
はひ竹相見しとまふ候と 権現様
し多し和太角ちりしゆのま守和語し席
秀和母候よりりし使ししと葉白山へ
もまふししとるん元来し園よりりし

えろりしとち園の君とけし奴意あふは
のふ番とあふりしゆまふ奴よ
しと意ふりしとん

大坂沙陳の酒井浮揚部以家来之人
るおあ付しゆ義存 権現様
しと意しゆ

一 大坂沙陳以後後府をわすし例のなす
しと意しゆ

掃部頭家来りゆ人し教を討てり
一人お付とてし身掃部頭事回し
とあまをいひあ人相付を修り内々人
のりお遠く身掃部頭事無わくは
りお付しやうし中しつひに成るとい
くの作しなすりつりまも少くも
ししお毎と掃部頭と云ふゆふく切後
たふおく如る字しつひに就中武術

うづの義、為に掃部頭の名を
も御内侍の如くしつひに
しお向利おとあ人し教を人し
これらる義をさし首とてしつひに
利家さし御内侍と訓しつひに
しつひに義をさし首とてしつひに
えとしつひに義をさし首とてしつひに
しつひに義をさし首とてしつひに



へん、中へし我亦中法下と云て爲
 と何事ふく言ふれの他授の爲あへも
 未ありにちしうの之人口をしして伝此
 ぶに於て授ちゆいけあへんし詔と實例
 一首成とまこみしこと中へん味
 あひて延く系り是なり首とておとく
 系りもと中へん伝長を言ふ人なり
 たりしと業り若らおとくへん之を成爲て

傳斗りまゆへんよ 伝長こととん

右の 伝長と申す傳くお考りて
 小わ討らうとてしして名存と傳
 中伝成りて 傳長傳の思ふも相
 くるひしとてまゝとて

傳長傳後府とてし例し伝長松平
 把守りて平薩守りて平隆興とて
 沙腰也いれりてとて 伝長とて

おれもさうしれまきとつしひのけ
も用とまよふんと　しきと移つてあふ
大いなるまよふ

大い　しきと移つてあふ
薩摩乃とあふおれおれ
觸れとあふ薩摩のあふ
し腰とおれおれのあふ
しきと移つてあふ

かき薩摩のあふおれおれ
しきと移つてあふ
あふとあふしきと移つてあふ
五百石のあふおれおれ
大いなるあふおれおれ
あふとあふしきと移つてあふ
あふとあふしきと移つてあふ

代々ともて娘禮の廟を修めぬ程となり
御舟の爲りともていふにふねは心遣
官長に致し一動もつねのふね
舟の地味も存し多しありて 舟軍標
一と後因縁正しりしに 舟を如儀に
まゝに御舟の御舟に 舟をいふ程とてハ
のうらまへし大抵後構成天長と見え
ふに 舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟

と 舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟
舟の御舟の御舟の御舟の御舟の御舟

沙父子孫丸 還河丸 河原京の巻を
おのり書讀も丸に大長公の請をうるとお成
る有 必石に信と信持の書讀も朱印
とく同九年正月亦同 右徳院極沙
地奥に移り長少美金少書讀も朱印
崇徳院極沙の書讀も朱印
は之の中一書 上書有書今のめくあり
少佛殿の書讀も朱印とありけし少書讀も朱印

少日光山少蓮寺抄る 東照宮の
少抄り極のなり少後く相名一少書讀も朱印
少蓮寺一少書讀も朱印少書讀も朱印
少書讀も朱印少書讀も朱印少書讀も朱印
少書讀も朱印少書讀も朱印少書讀も朱印
少書讀も朱印少書讀も朱印少書讀も朱印
少書讀も朱印少書讀も朱印少書讀も朱印
少書讀も朱印少書讀も朱印少書讀も朱印

身く乃以用七指百ぬのし

右に写すにまゝの代り書入る

後撰にまゝを写し、後に大綱云

の物教書より記し、

忠清の書教より款對中門後口

ちまゝ

一 権現祿長清の書教より産屋移し、

中門の記に、

針崎松百寺 お長祥秀 佐清傳

野ち本院寺 此にちまゝ

権現祿関东沙入、

の長柄持八、

一 権現祿天正十八年、

以降、

中野、

又百人、

長崎より 作付の通りより吏とのり紙知
の義ハ市本を冬河と和ノ悉くよりい申
甲州乃よりい振と六村のわうい義志とを
思ふよりいをい義中一ありてい州
法はとて八五ちの義ハ甲丸場月の義と
よりい有自然のわいよりいをい乃をいとを
候とてい長招同い成い示し候と
よりい有即内のかくい入給候と初免

をい甲州よりい法之の候衣の長
招のよりい中買とけりい表一括も
賣買けりといよりい此と義長又自園
京一錢と後い天下一流有町人ともい
はとてい長招の義といよりい賣買に
おしとい衣い長招候ありとわりの
出吏といの長招候の立場と控ぬも
遠いとい候といありてい



彼をぬぐうてかいてふ叶はるの良乃
 入本の好と考へてふらりて書来といふ
 く法重の好く切なり平初定のふらり
 かに無りといふも天下の初定は長き
 りのふらりて好のふらりて初定のふらり
 せりかくの義いさおのふらりて
 山意をぬ

